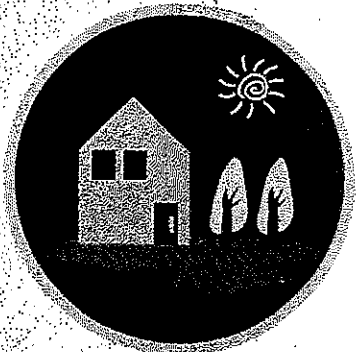
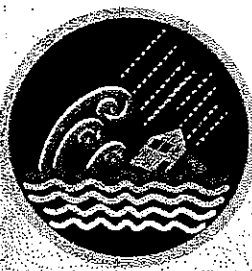


# 自然災害や災難から 子どもを守る



世界各地から地震や津波、火山噴火、さらには巨大化したハリケーン、台風、洪水、あるいは日照りなどの自然災害のニュースが相次いで届く。犯罪や事故も毎日、世界のどこかで起こっている。

海外に在留する日本人の総数は、昨年十月で二三五万人を超えた（外務省調査）。そのうち「長期滞在者」（三月以上の海外在留者のうち、いずれ帰国する予定の日本人）は、約八十七万人（約六四パーセント）である。

慣れない海外で生活していて自然災害や災難に遭遇し、ショックを受ける子どもたちも少なくないと思われるが、心に傷を負った子どもたちに、大人はどのように対処したらよいのだろうか。

精神科医師として、世界各地の在留邦人のメンタルヘルス支援に携わってきた鈴木満さん（外務省診療所）に、具体的な事例を踏まえた対応の仕方を聞いた。

また子どものためにできる危機管理について、海外生活カウンセラーの福永佳津子さんにも、インタビューをお願いした。

取材・文 小山和智



(弘文堂、本体2,400円+税)

「こころの危機管理」の考え方、やるべきことなどが、多くの事例に基づいてやさしく説明されている。在外中だけでなく、帰国者の「(外の世界を)知ってしまった寂しみ」にも触れられており、人生を前向きに生きようと思わせてくれる。



## 鈴木 満さん

外務省メンタルヘルス・コンサルタント。医学博士。

1987年から5年間イギリスのロンドンに駐在し、海外での子育ても経験した。英国国立医学研究所の神経生物学部門研究員として再生医学研究に従事。以後、世界各地の邦人メンタルヘルス支援に携わっている。国内でも、2011年の東日本大震災などの被災者に対し、こころのケアを継続して行っている。

著書に『異国でこころを病んだとき』(弘文堂)がある。

## 援護統計の数字は

### 氷山の一角

子どもを帯同するような地域であれば、それなりに現地の医療機関も整っているが、異国で「こころ」を病む人にとって治療の場は限られるし、日本語で相談できる場所となるとときわめて少ない。赴任先が先進国であったとしても、海外は大半の日本人にとって「精神医療過疎地」だと、これまで世界各地の在留邦人のメンタルヘルス支援に携わってきた鈴木満さんは言う。

まして大規模な災害・事故、犯罪・テロ、新型感染症などに巻き込まれた場合、正確な情報を得られず、自らの意思で移動することまで制限されるに至ると、誰もが不安や精神的混乱が極度に高まるし、「こころの傷」を負うことも少なくない。

「災害・災難が去ってしばらくたっていても、微妙な「こころの揺らぎ」が残ることも多いのです。それを訴えるにも、母国語が必要となります。その訴

別表 海外邦人援護統計の推移

(外務省 調べ)

	2006 (平成18) 年		2011 (平成23) 年		2016 (平成28) 年	
	件数	人数	件数	人数	件数	人数
事故・災害	395	683	271	999	240	319
強盗・窃盗・詐欺の被害	5,839	6,290	5,010	5,364	3,957	4,137
その他の犯罪被害	347	502	257	339	245	272
触法・加害	529	604	437	465	378	404
遺失・拾得	3,157	3,219	3,415	3,509	3,451	3,448
その他 (精神障害) (自殺および未遂)	6,256 (313) (81)	7,473 (326) (92)	7,703 (216) (77)	8,857 (219) (78)	10,295 (207) (57)	11,857 (313) (81)
計	16,523	18,771	17,093	19,533	18,566	20,437

えと情動を、言語と文化を共有する人に受け止めてもらうことは、それ自体が治療的といえます」と言う。

別表は世界各地にある日本大使館や総領事館などの在外公館が対応した、日本人援護の事例を二〇〇六年から五年ごとにまとめたものだが、二〇一六年で一万八五六六件(二万四三七人)あり、そのうち三九五七件が強盗・窃盗・詐欺の被害、三四五一件が遺失・拾得にかかわるもの、その他の犯罪被害は二四五件、事故・自然災害の被害は二四〇件となっている。また「その他」のなかには、三一三人の精神障害、八十一人の自殺および自殺未遂が含まれる。地域的には北米・アジア・欧州が多く、全体の九割に及ぶが、男女比はほぼ同じである。

「しかし、この数字は在外公館が重大かつ緊急度が高いと判断して介入した事例です。実際には家族、勤務先の上司・同僚、旅行会社、保険会社などが介入して帰国した例や、現地医療機関を受診した例もあり、この数字をはるかに超えると推測されます。援護統計の示す数字は、氷山の一角」と捉えた方がいいし、子どものケースに至っては見過ごされている可能性も高いのです」と鈴木さんは話してくれた。

## 「こころ」の発達は一様ではない

まず、災害・災難に遭った子どもの内面に何が起ころのかについて、基本的なことを整理しておこう。

脳科学の難しい話はさておき、ヒトの脳は、胎児の間に「下等な脳から高等な脳へ」と進化の過程をたどるそうだ。妊娠十五週目くらいでネコ程度の脳となったころには、まだ脳に少ししかシワがないが、人間らしいことを考える大脳皮質がどんどん発達して、シワの数が急速に増えていくという。

「生まれたあとも、どんどん神経細胞同士の連結が進みますが、大人のように想像したり類推したり、総合したりする能力を獲得できるまでの過程には、個人差も大きいのです。男女、年齢、年代、世代、文化環境や地域性、教育環境、興味の対象などの要因により、個々の子どもの発達は一様ではありません」

子どもによって、視覚的に捉えるのが得意な子もいれば、言語的に捉えるのが得意な子、聴覚での把握が得手の

子どももいる。いわゆる「IQ（知能指数）」といわれる側面のほかに、「EQ（心の知能指数）」つまり自己や他者の感情を知覚し、自分の感情をコントロールできる能力の側面でも、個人差が大きいことになる。

「サンリテグジュベリの小説『星の王子さま』に、『かんじんなことは目に見えないんだよ』ということばが出てきますね。大人になると、見えていてもさまざまな思い込みが目をもくもくさせることが多いのです。子どもは全体的な感覚で捉えているので、周囲の大人もその視点に立ち戻ることが、子どもの「こころ」を理解する一歩です」と鈴木さんは話す。

## 危機的な事態における 子どもの反応

個人差が大きいということ踏まえ、うえで、子どもの各発達段階に共通する特性は知っておきたい。鈴木さんはセーブ・ザ・チルドレン（※）の資料を基に、その特性を説明してくれた。セーブ・ザ・チルドレンは、世界最大級のネットワークを持つ、子ども支援

専門の国際組織である。

「危機的な出来事に直面した子どもたちは、大人とは異なる反応や考えを示します。その反応は年齢によって異なりますので、必要とする支援も異なります。また子どもは体も小さくケガをするリスクが高いうえ、保護者・養育者へ社会的・感情的に愛着を持つなど、子ども特有のニーズがあります。だから、緊急時の悪化した環境においては、きわめて脆弱といえます。

どの子どもでも、ふたたび同じことが起きるのではないかという不安、あるいは自分の大切な人や自分自身が傷いたり、離れ離れになってしまったりするのではないかという不安を抱きます。破壊された町や地元の写真を見ただけで反応もします」

具体的なストレスのサインとして、  
・震え、頭痛、食欲不振、痛みなど、  
・不快感を伴う身体的な症状がある。  
・泣いたり、取り乱したり、パニックになる。  
・攻撃的で他者を傷つけようとする（たたく、蹴る、かむなど）。  
・保護者・養育者からずっと離れない。  
・混乱し、適応ができない。  
・動かない、もしくはほとんど動かない、引きこもっている、とても静かになる。

・ほかの人に反応しない、まったく話さない、あるいはとても怖がる、ビクビクしている。

といった症状があれば、要注意とのこと。

「東日本大震災の直後に、フィリピン人の母親と面談したのですが、三歳くらいの子がまったく無反応な状態でした。母親は「この子は大人しいから大丈夫」と言っているのですが、精神科医から見れば心配な状態でした。まったく話さなかったり、母親にべったりくっついていたりしているのも、要注意です」と鈴木さんは話す。

### ※ Save the Children

1919年に英国で創立されたNGOで、国連経済社会理事会の総合協議資格を持つ。  
日本人のサイトは  
<http://www.savechildren.or.jp>

## 脳の発達段階に 合わせた対応を

個々のケースでは、個人差があることを踏まえながら、主に以下の四段階に分けて考えていく必要があるそうだが、「幼児は、いま」のことしかわからず、「明日になったら」と言っても理解できません。優しく抱いてあげることで、いちばんの「安定剤」だったりします。

少し成長すれば社会性が出てくるし、ことばも発達してきますが、緊急時の重大さ、「今日は特別」といったことはわかりません。周囲の大人の状態に大きく左右され、大人が慌てれば混乱して、極端な行動をしたりします。また、「魔術的」な思考(Magical Thinking)といって、おまじないや空想に左右されやすいですね。

さらに小学生になると、抽象的なことを考えられる(想像できる)し、原因と結果との関係も理解できるようになります。死や失うことなども理解できるようになります。感情も豊かになっていきますが、まだコントロール

はうまくできません。また、自分のことだけではなく他人を心配したり、「自分のせいじゃないか」と自分を責めたりすることもあります。

そして中学生になったころの「思春期」は、独立の年齢ともいえ、自意識が強くなりますね。親よりも友達の方が大事になりますし、対人関係を心配しすぎる面も出てきます。しかし、世界が大きく変わったことは、まだ十分に理解できません」

## 被災後の子どもに してあげられること

では、自然災害や災難に遭遇し、心に傷を負った子どもたちに対して、大人はどのように対処したらよいのだろうか。

「まず、恐かったことや悲しかったことを、ゆっくり聞いてあげて、次のようなことがけをしてください。

「〜ができなくても、恥ずかしくないんだよ」(粗相を恥ずかしがらせない)  
「心配なことがあったら、何でも言っただけ」

「あなたは、ちっとも悪くないよ」(自分を責めないようにさせる)

「お父さんやお母さんが守ってあげるからね」(どこかに行ってしまわないかという不安を取り除く)

そうして、子どもが考えていることを察して、安心させてあげることです」  
と鈴木さんは話す。

心理学ではよく「積極的傾聴(Active Listening)」といわれるそうだが、「傾聴とは、気持ちを含めて聞くこと、相手の感情を受け止めながら、思いやりをもって聞く姿勢です。相手を尊重し、相互理解を深め、ストレスや緊張を軽減し、問題に対処できるような支援するという一連の作業です。

まず支援が必要と思われる人に声をかけますね。必要なものや気がかりなことについて尋ねます。気持ちを落ち着かせる手助けをするわけですから、「相手の話に集中」して耳を傾けること、「あいづち」を打ちながら聞く姿勢、子どもの場合は声に出せないことも多いので、その年齢を勘案して気持ちをくみ取る「共感」、「ニーズを明確にするための質問」、そして「こうだったよね」「こうしようね」と「要約」してあげる。この五要素が基本です」とのこと。

また「心的外傷(トラウマ)」とい

## 自然災害や災難から 子どもを守る

### コラム

#### PTSD (心的外傷後ストレス障害)

PTSDはトラウマを負った人の一部に発症する。被災後数週間から数カ月にはわたる潜伏期間をおいて発症し、災難が去ったのちも症状が長引く。子どもでは、悪夢、フラッシュバック、回避、抑うつ、自責、身体化、退行などがおもな症状。

うことばもよく使われるが、圧倒されるような精神的衝撃で、強い恐怖や不安を伴い、その人が対処に困難を感じるような外的出来事を体験した場合、あるいは生命や身体的安全への脅威や悲惨な場面等を目撃した場合などに受ける「心の傷」を示す。

「しかし人類の歴史は、災害との闘いの連続です。トラウマを受けると心身にさまざまな反応が生じ得ますが、これは「異常事態に対する正常な反応」であり、特別なことではありません。それらに対して希望を持って乗り越えていく力、進んでいける力が人類にはあります。子ども自身も、元気になる力を持っています。前向きに、積極

的に生きていけるよう支えてあげましょう。そのためには、なによりもまず周囲の大人、特に親が落ち着くことが大事です」と鈴木さんは熱く語る。

### 海外生活で

### 心がけておくこと

甚大な災害・災難に遭ってしまったときは、大人もたいへんな状況に置かれているので、なかなか子どもの精神状態を観察することが難しい。しかし鈴木さんは、日ごろから習慣づけておくことで、子どもの発する「信号」を捉えて支えることは可能だと強調する。「やってほしいことは、できるだけ子どもをひとりせず、家族がいつしよにいる時間を増やすことです。できるだけ食事や睡眠などの生活リズムをいつしよにし、崩さないようにしましょう。また子どもが話すことは、バカバカしいと思っても否定せずに聞いてあげましょう。子どもにとってはあたりまえの考えですから。ただし、話したくないそぶりのときには、無理に聞き出さないようにします。」

行動に変化があっても、むやみに叱ったり突き放したりせず、受け止めてあげましょう。

長女・長男などには「がんばり屋さん」が多いが、気を遣いすぎている点も要注意だという。

「しっかりしている子ほど、日ごろからよく観察しておかなければいけません。精神的な負担が大きくなりすぎないよう、気をつけてあげてください。もちろん、家族同士であれば、抱っこをしたり、痛いところがあったらさするなどのスキンシップを増やしましょう。

先ほど、誰でも回復する力を持っているという話をしましたが、「安心していて、人とのつながりを感じられる人」「落ちついていて、希望の持てる人」「社会的・身体的・情緒的支援を受けられる人」「自分を助けられるという感覚を取り戻す人」が、回復できる人、なのです」

被災することはたいへんなことだが、その経験との精神的なものがぎや闘いの結果、成長していくのが人類だとしたら、日ごろから子どもといつしよにつくる「回復力」こそが、海外生活の基本になるといえよう。

(上記の内容は鈴木さんの個人的見解であり、外務省を代表するものではありません。)

# 「子どもの安全を守る」

アメリカのルイジアナ州で起きた日本人留学生射殺事件（一九九二年）以降も、日本人の若者が事件に巻き込まれる例はあとを絶たない。子どもを帯同する場合も「ここは大丈夫」と呑気に構えていて、悲惨な結果に泣くことのないよう、海外仕様の危機管理術を知り、スイッチオンして出かける必要がある。

そこで、家族のための海外安全研究の草分けともいえる福永佳津子さんに、たんに「子連れ駐在では〇〇に気をつけよう」という話にとどまらず、幼児から若い世代にかけての若者の安全確保や安全教育について、話を聞いた。



福永佳津子 さん

海外生活カウンセラー／海外邦人安全協会 理事／NPO 国際人をめざす会副会長

上智大学卒。ニューヨーク在住6年、マンハッタンビルカレッジで修士号(MH)取得。ニューヨークWISH日本語電話相談室カウンセラー。帰国後は、海外生活カウンセラーとして講演・執筆が多数。著書・編書に「ある日海外赴任(ジャパンタイムズ)」「海外安全ガイド(KDDクリエイティブ)」「アジアで暮らすとき困らない本(ジャパンタイムズ)」など。2男2女の母。

## 出産直後から 子どもの危機管理が 始まる

危機管理といっても、未成年や子どもの場合、自分で危険を察知し、回避する行動を取ることは難しいですよ。

福永 もちろん、子どもを危機から救うのは、親の責務です。何が危ないことをかを理解し、それを回避できる能力・体力が備わる年齢……少なくとも十二歳くらいまでは、親または親に代わる第三者が子どもを守らなくてはなりません。

—— 出産直後から子どもの危機管理が始まるわけですね。

福永 待ったなしです。日本ではあたりまえと思われることが、海外では「育児放棄」「幼児虐待」とみなされ、警察沙汰になりかねないと心しておくと必要があります。

やっとな子どもが寝てくれたから、そつと家を抜け出して近くのスーパーに買い物に出かけたところ、戻ってきたらパトカーが家の前にいて、近所の奥さんたちが警官に大声で何やら叫んで

いる。警官がこちらに向かい「あなたは育児放棄をしましたね？ 児童虐待の疑いがあります。署まで同行を」と言われて……という例など、決して大げさな話ではありません。

スーパーの駐車場に停めた車の中に乳幼児だけ残して、「ちょっと買物へ」もアウトです。周りにいる人は、危険極まりない駐車場という場に危機回避能力のない乳幼児がひとりで置かれていることは、犯罪以外の何物でもないと考えます。目撃した人が急ぎ警察官に通報するのは、当然のアクションとなります。

—— 最近、日本でもマイカーの中で幼児が死ぬケースが報道されますが、「幼児虐待」として扱われることは、まずありません。

福永 日本で「はじめてのおつかい」というテレビ番組があります。子どもが親から頼まれた「おつかい」を健気にやり遂げようとがんばる姿が涙を誘っています。しかしその一方で、海外から見れば、年端も行かない子どもだけで買い物に出す行為は考えられない暴挙です。感動の番組も、海の向こうの親たちからすれば、「怖くて見てられない、とんでもない番組」となってしまうのです。

## 小学生までの 危機管理や 安全教育は？

—— 子どもの叱り方にも注意がいきますか？

福永 「昨日、パパにたたかれちゃった」と先生に言ったがために、警察の事情聴取を受けることになった例もあります。北海道で山の中に子どもを置き去りにした「猿事件」がありました。父親は、お仕置きが目的だったとうなだれていましたが、幼い子の姿が置き去った場所から見えなくなつて大騒ぎとなりました。熊が出没する地区だったこともあり、さすがにこのときは、国内でも「熊に襲をさせるつもりだったのか？」といった厳しいコメントが言われました。安全面への配慮なしでは、猿と称する行為が虐待以外の何物でもなくなるということです。

—— ベビーシッターを雇う感覚も面食らうのではないかと思うのですが。福永 アメリカの現地校では、PTAの会合は夜開かれ、夫婦そろって出席が求められます。ご近所の夜のパーティーでも、夫婦そろって参加するのが

原則ですから、家を留守にする間は、子どもだけに任せず、かならず信頼できるベビーシッターを雇います。

時間帯にもよりますが一般的に十二歳まではシッターされる側に、十二歳を過ぎたらシッターをする側になるというのが暗黙のガイドラインでしょうか。子どもたちは大人のシッターさんより、年齢の近い近所のお兄さん・お姉さんが遊びに来てくれることを、ことのほか喜びます。彼らも、どうやって子どもたちを安全に守りきれんかを一生懸命考えてやってくれます。彼らはその歳までに親から「危ないことはどういふことか」「それから身を守るためには、どうしたらいいか」をたたき込まれているので、まさにその知恵を役立てる機会でもあるのです。

—— その十二歳ころまでに、何を教え込むのでしょうか？

福永 いろいろありますが、たとえば誰かが自分が不快に感じることをしようとした場合に、きっぱり「NO!」と言い切ることを教えることも、一つです。次に、性的ないたずらに対しても、男児・女児を問わず「水着で隠れる部分を誰かが触ったら、先生・親に言いなさい」とつねに言っておきます。こうした場合、子どもが言いだしやすいうように、わかりやすく教えておく必





要があります。

留守番ができる年齢になったとき、あるいはやむを得ず留守を子どもに任せる場合に、そのタイミングをねらって犯行が行われないよう、親の不在を告げない言い回しを覚えておかなくてはなりません。「電話口で『パパとママはいない』と言って子どもだけで留守番していることを明かしてはダメー」「パパとママは手が離せません」「パパかママにあとで電話してもらいます」と言いなさい」と教えます。我が家では「外出先から戻ったときに『ただいま』と大きな声で家の中に向かって言おう」とも教えていました。侵入犯がいた場合に鉢合わせしないようにする（犯人に逃げるチャンスを与える）知恵としてです。

—— 映画「ホームアローン」のような……  
福永 いい例ですね。子どもの危機管理を考えるうえで、バイブルともいえるべき必見の映画です。主人公は八歳の少年ですが、ひとりであることを他人に悟られないための作戦や仕かけが見事で、痛快でした。

## 「自分の身は自分で守る」を教える

—— 中学・高校くらいになるとどう変わりますか？

福永 「自分の身は自分で守る」という確固たる気持ちを持ち、そのために必要な情報を得て、そのうえで周りに起こる危機に対してつねに「勘」を働かせ、回避対応するよう訓練を重ねていきます。

—— 海外では、「It's your own risk（何事も自分の責任で）」と突き放されることも多いですね。

福永 まだ大人の支援が必要な年齢ですが、自分で考え判断する危機対応力を、より高める時期でもあります。誘惑も危険も格段に多くなり、「知らなかった」がために加害者扱いされたり、犯罪に加担させられていたりすることもあり得ます。

高校の入り口には金属探知機が置かれ、銃やナイフなどの危険物を持ち込まないようチェックしていたり、移動の足（車）の確保がつねに最大のリスク管理事項になる地域も多いです。ま

た校内でも人種間・グループ間の対立感情が渦巻いていたり、些細なことで喧嘩が暴動に発展する危険性があつたりして、制服警察官が常駐していることも珍しくありません。幼いころとは別の種類の危機に対して、うかつに巻き込まれない知恵と強い意志が求められます。

—— 日本の若者が海外で事故・災害に遭った場合、どういう状況になるかをマスコミではあまり取り上げません。たとえば「九・一一（アメリカ同時多発テロ）」のとき、単身で現地に行った若者はどうだったのでしょうか？

福永 世界を震撼させた悲劇から、今年で十七年がたちます。同時多発テロは、すべての飛行機の発着をストップさせたために、帰国のめどが立たないなかで、若者たちはフライトの変更や宿の延泊交渉、予定外の出費の手当てに即座に対応することが求められました。しかし対応できるだけの英語力の準備がなく、コンタクト先の旅行会社の連絡先も知らず、ましてや頼るべき日本総領事館の所在にも無頓着で、右往左往する人がたくさんいました。

私も同宿していたドミトリ（学生向け簡易宿）にあった、たった一台の電話には、日本の親から子どもの安否を問う電話がひっきりなしにかかって

きて、受付嬢をあきれさせました。「ほかの国の親は、誰も電話をしてこないわ。家から送り出す前に、しっかりと危機管理を教えているからね」と言われて、身を縮めました。

万が一に備えて何を準備しておけばいいのかを知り、自分で事態を切り抜ける力を備えてこそ、安心して海外に出かけられると知るべきでしょう。

## 子どもの

## 「ケガ」の備、はせ

### 要注意

—— 海外に住む子どものメンタルヘルスについて、保護者はどうも無頓着になりやすいように感じます。

福永 そうですね。非常事態で混乱した事例に、一九九八年のジャカルタ騒乱による国外退去も挙げられると思います。国外退去の勧告が出され、数時間間の中に取るものも取りあえず（荷物はスーツケースのみOK）空港に走り、熱帯の国から五月の故国に退避することになったという話も聞きました。事態が収まるまでの数カ月を慣れない（ジャカルタ生まれの子もいる）環境下で過ごしたあの騒乱事態は、子ども

にも少なからず精神的な影響を残したことでしよう。なによりも親の混乱にふり回され、事態を理解するにはあまりに幼い子もいて、突然の環境変化に戸惑いを覚えても不思議ではありません。

—— 親は「日本に帰ることができた」で安心していたりしますけど。

福永 実際に自分たちが被災者や被害者になったわけではないものの、滞在国の混乱で、もぎ取られた気持ちや落ち着かせられず不安定な時期を過ごしたことは容易に推察されます。家財も全部残したまま、ふたたびその地を踏み可能性があるやなしや……友達も知り合いもバラバラとなり、さよならのことばがけもままならなかったあの日のこと……子どもだけでなく、親にも相当な心理的圧迫があったはずですよ。

—— 直接身近に起きた事件・災害でなくても、大人がテレビのニュースに見入っている際に、子どもがそれを目にしてしまうこともありますね。

福永 子どもがテレビ画面を通してショックを受けることにも警戒が必要ですよ。直接被害に遭う可能性よりも、被害現場の映像を通して見えてしまう可能性の方が、はるかに高いです。

たとえば「九・一一」の際に、現地の精神科医たちが、子どもに悲惨な映

像を見せないように、と訴えていましたし、実際、テレビのテロップでも、警告文が流れました。「三・一一（東北大震災）」の際も同様です。人が流され、家が壊れていくさまを繰り返し見ることは、子どもに残像として精神的負荷をかけてしまうことに、大人たちは気づくべきです。子どもたちがダンプボールをビルに見立てて、おもちゃの飛行機をぶつけて遊ぶ……ということが始まって、大人は慌てるのです。

日本人はねらわれやすいといわれ、「お金持ちで、多額の現金を持ち歩く」「クレジットカードや情報の管理が甘い」といった印象がひとり歩きしている。実際、安全な日本で育つたために無警戒・無防備で、瞬時の防衛判断・動作はほかの国の人よりも不得手な向きも多いかもしれない。子どもまでもが高額のスマホを持ち歩いていて、格好の標的となってもおかしくない。

幼いときから「自分の身は自分で守る」という確固たる気持ちを持たせ、危険回避の勸、を養わせる、という福永さんの話は重い。目にした衝撃的なテレビ画面によって、「こころに傷を負う子どももいる。子どもの発するさまざまな信号を見逃さず、早目に対応していききたい。」